

分 科 会

第一分科会 地域の子育て支援を考える

話題提供： 田口 信一（母子生活支援施設 白鳥寮長）

野村 貴子（子育て広場「きらら」代表）

土屋美恵子（NPO法人「保育サービスひまわり」前理事長）

第一分科会は、地域の子育て支援を考えるということで3名の話題提供者においでいただいた。母子生活支援施設白鳥寮で家庭支援センターおよび子ども在宅サービス事業を幅広く実践しておられる寮長の田口信一氏、特定非営利活動法人「保育サービスひまわり」前理事長の土屋美恵子氏、子育て広場「きらら」代表の野村貴子氏である。それぞれの地域における活動の経緯を話していた。いずれも民の動きであるが、必要とされる支援の内容を汲み取り、援助を求めている地域

の方々へ、質の高い支援を模索して、即実行された内容である。これから子育て支援に携わろうとする人たちへの提言として、「できることから始めていくこと」が第一歩であるということを強調された。パワーあふれる実践の紹介は、この近隣の地域だけによりいっそう強く受講生たちの心に響いたようである。子育て支援は多くの人たちとの連携をもつことでよりいっそう支援の輪が広がっていくということが再認識できた機会であった。

（佐々 加代子）

第二分科会 保育施設における子どもへの適切な対応を考える

ワークショップ講師： 門馬 乙魅（CAPユニット）

荒川美智代（CAPユニット）

この分科会では、CAP（Child Assault Prevention）のワークショップを体験した。子どもの虐待や事件から子どもを守る取り組みの一つで、子どもに「嫌な時は嫌だ」と言える力、あらゆる暴力から自分を守る力を養うプログラムである。幼児を対象としたプログラムを実際に体験し話し合った。参加者は26名であった。

プログラムでは、安心・自信・自由と権利について繰り返し伝えていくもので、安心・自信・自由の大切さを参加者一同あらためて認識し、子どもに安心・自信・自由を感じてたくましく生きていける保育者の関わりを見直すことに役に立った。子どもへのことばのかけ方一つでも感じるものが違うこと、安心の大切さ、子どもの心に寄り添う

保育の大切さもあらためて共感するものであった。また、このプログラムは、自ら守る力の一つに仲間を作ることが上げられている。保育者が保育現場において仲間を作り実践していくことにもつながる。CAPプログラムについて知ることができ、保育においても子どもに力を育てる取り組みが必要と参加者が一様に共感することができた。ただ、テーマからは内容がずれており、保育施設で集団保育の中で見落とされがちな対応の問題点について事例を挙げて検討することを期待してきたとの参加者もあり、この点については、今回の内容をステップにして次回に発展させたいと考える。

（中山 正雄）

第三分科会 「気になる子」の保育を考える

話題提供： 小林 優子（社会福祉法人 わらしこ保育園職員）

増田美知子（東京つばさの会「高機能自閉症・アスペルガー症候群児者の親の会」主宰）

茶木 弓（東京つばさの会会員）

本分科会では、なんとなく発達につまずきがあるお子さんだけどう理解していいかわからない、いわゆる「気になる子どもたち」の保育実践をテーマにした。多くが広汎性発達障害、つまり対人関係やコミュニケーションの障害、こだわり・創造性の欠如を特徴とし、高機能自閉症やアスペルガー症候群と診断される子どもたちである。彼らの障害特徴についてはまだ十分理解されず、残念ながら適切な配慮が得られない場合も少なくない現状である。今回は現場で悩む保育者とアスペルガー症候群の親ごさんから日ごろの悩みや工夫、思いを報告していただいた。わらしこ保育園の保育士小林優子さんからは「個が輝く集団づくりを目指して（発達遅滞Y君の成長とクラスの成長）」と

題して、クラスの友達や保育士が毎日の生活を通して模索しながら障害児のY君を理解していく様子が報告された。またアスペルガー症候群の親の会（東京つばさの会）の増田美知子さんと茶木弓さんからは自閉症スペクトルという捉え方の意味や、アスペの子どもたちが生活場面で見せる行動特徴をわかりやすいエピソードを交えながら紹介していただいた。分科会の参加者にはアスペのお子さんを担当した経験がある保育者が多く熱心な質問が相次ぎましたが、親の2人から具体的で有益な回答や示唆が豊富に紹介され、こうした検討の場に当事者の参加がいかに重要であることを痛感した分科会であった。

（堀江 まゆみ）

卒業生との懇談会

セミナーの後に行った懇談会には9名の参加があった。教員は10名参加した。短い時間であっ

たが、現場で苦労しながら頑張っている状況が話され、個別にも相談に応じる時間が持てた。今後でも継続したい企画である。